瀧山聖流展を偲びて

瀧山聖流居士　（故名高谷瀧夫）

遺　詠

花曇り　陽明門の　動く中

満開に　雪重なれり　花しずく

五五年春

枯菊を　残して庭と　別れけり

金魚減る　池は錆で　傷を負う

五五年秋

乳飲児の　昔の心　母恋し

五五年冬

目　次

序　……2
歴史の流れと故人の軍人生涯　……3
シベリア出兵　……3
満州事変　……4
支那事変（日中事変）　……5
大東亜戦争　……6
敗軍の将は兵を語らず　……8
兵馬倦怠の間の故人の足跡　……9
父の入院生活　……10
一　父の入院　……10
二　薬害に苦しむ　……10
三　脳血栓に倒れる　……10
四　ギックリ腰になつて　……11
五　えん下麻ひに苦しむ　……11
六　飢餓と戦う　……12
七　仏縁にすがつて　……13
八　快復そして名古屋へ　……13
父の突然の死　……14
親思う心にまさる親心　……15
献詩　……15
献歌　……16

序

「生寄也。死帰也」

人生はこの世を、身をよせる仮の宿としているだけで、死ぬというのは、故郷へ帰るようなものである。

死に関する言葉は、古今東西に拘らず、我々の知るところでも、限りのないようだが、凡人の身ではそのように、簡単に割り切れるものではない。

「人生自古誰無死」
「寿命猶如風前燈燭」
「人生如朝露」
「有生者必有死、自然之道也」
「生者必滅会者定離」

特に岳父「高谷滝夫」の逝去は、我々に無情の風を吹きさらし、慟哭をこらえることができず、悲しい涙は物言わぬ言葉となつたのである。

仏教では久遠の過去、永劫の未来を説いている。即ち、人間の命は死によつて亡くなるものではなく、無量寿の命だといい、中国に於ても古人有言、曰、「死而不朽」と述べている。

後生（死後）にも心魂が霊存すると論され、花びらは散つても花は散らず、結実していくことを教えられるとき、生前の故人を偲び合掌することは、最大の供養である。

親は千里に行くとも子を忘れず、幽明界からの霊魂の加護のもとに、遺族は自己の心の中を正視して、精進しなければならないと、体悟すべきである。

これらのことが永遠の灯明となるのであろう。

是に故人を偲び、小文をしたためて、御冥福を祈りたい。

昭和五六年五月　　寺前信次

歴史の流れと故人の軍人生涯

明治二八年八月一五日、「高谷逸次郎。とよの」の長男として、和歌山県本宮町に生れる。

朝鮮における日・清両国の優先権の争いから、明治二七年八月一日、日清戦争（日本は朝鮮を独立国として認め、清国は属国として扱う）が勃発し、明治二八年四月一七日、下関条約によつて終結したが、講和条約で獲得した遼東半島は、独・露・仏の三国から返還を迫られ（三国干渉）、世は将に風雲急を告げる、国家危急存亡の時である。

爾来、父母の厳寛、慈愛に満ちた薫陶を受け、長じて滋賀県立彦根中学校に入学する。明治四五年、青雲の志を抱いて、陸軍士官学校に学ぶ。即ち陸士第二九期生である。

大正五年、陸軍士官学校を卒業。陸軍歩兵少尉に任ぜられ、第三師団（名古屋）隷下の歩兵第三十三聯隊付（愛知県守山市）となり、それ以降、開闢以来の青天の霹歴ともいうべき、敗戦を迎えるまで、死を賭して軍務に服し、国家のために身を捧げたのである。

シベリア出兵

大正三年（一九一四）六月、オーストリア帝国皇太子が、サライエヴオに於て、ボスニアの一青年によつて、暗殺されたことに端を発し、第一次世界大戦へと戦禍が拡大され、大正六年にはロシア十月革命が勃発した。

大正七年、日・米両軍は、極東の平和維持、満州の権益擁護、チエッコ軍の救出の名目のもとに、満州及びシベリアに出兵することになつた。

同年八月、第三師団の二万二〇〇〇名は、海を渡りシベリアのザバイカル州附近に、派遣されたのである。

故人はシベリアの曠野を馳駆し、酷寒零下五十度の寒気と、パルチザンの執拗な跳梁と戦いながら、苛酷な環境を克服して初陣を体験し、長い戦陣生活を過したのである。

其の時の木彫のロシア人形を、死ぬまで愛蔵し、英会話が堪能だつた故人は、アメリカ兵と語しあつたことを思い出し、語り草にしていたことが、彷彿として偲ばれてくる。

シベリアから凱旋後は、第二十師団（朝鮮咸興）に転任し、鮮満国境警備の任務に服す。

其の間、つれづれに猟銃を手にして、雁や鴨或はノロを射ち、青春時代を満喫した数々の話も、懐しい思い出である。

朝鮮から帰還して、大阪の歩兵第三十七聯隊中隊長を拝命する。

大正十四年一月二十六日、「阪部ひで」と偕老同穴の契りを結び、大正十四年に和子、昭和二年に昭子、昭和四年に道夫、昭和六年に直枝と、一男三女をもうけた。

三十有五年に亘る軍籍中、この時代が最も平和で、家庭的な生活を過したようだ。

満州事変

昭和五年十一月、浜口首相が東京駅頭で狙撃され、続く昭和六年三月、陸軍クーデタ未遂の三月事件へと進展し、愈々、軍部の勢力が合頭して、戦争とファシズムの道へと辿つていつた。

昭和六年（一九三一）九月十八日、午後十時半ごろ、奉天（瀋陽）郊外の柳条溝に於て、満州鉄道の線路が爆破されるという重大事件が勃発した。

日露戦争の勝利の結果、帝政ロシアから継承した権利にもとづき、満州に駐屯していた関東軍が、計画的に起した事件であることは、戦後になつて証言されたことだ。

日本陸軍は、これを契機に、中国正規軍の駐屯地の「北大営」を襲撃して占拠し、奉天。新京（長春）その他の諸都市を占領するという、軍事行動を進めた。

これが所謂、「満州事変」の発端であり、十五年戦争の導火線となつたのである。

（中国では九。一八事件と称している）

大阪歩兵三十七聯隊から、秋田の歩兵第一七聯隊中隊長に転属した故人は、事変の拡大にともなつて、満州の地に駒を進めた。二度目の征途についたのである。

一望千里の荒野を駆けめぐり、熾烈な砲煙弾雨の中を、率先垂範して陣頭に立ち、卓越した指揮統率を発揮したのである。

特に高邁な徳性を備えて、部下と苦楽を倶にした強烈な責任観念は、部下将兵を心服させたと承つている。

今も尚、当時の部下だつた戦死者の遺影が、自宅に掲げられており、私にも中隊長としての心情が、誰よりも理解できるようである。

支那事変（日中事変）

昭和七年一月、満州の戦火は上海に飛んで、上海事変となり、同年三月には満州国が建国を宣言し、清朝の廃帝「溥儀」が、満州国皇帝の皇位に就く。（清朝第十二代の宣統帝である）

同年五月、青年将校が「五・一五事件」を起し、昭和十一年二月一六日未明、陸軍皇道派将校約二〇名が、近衛師団・第一師団約一四〇〇名の軍隊を率いて、所謂、重臣を襲い殺害した「二・二六事件」となり、軍国化して行く。

昭和十二年（一九三七）七月七日、北京西南十三粁、永定河にかかる芦溝橋において、日中両軍の衝突事件が惹起し、陸軍は中国との全面戦争を決意したのである。戦火は再び上海に拡大され、海軍も参加して、全面戦争が開始されたのだ。（正式な呼称は支那事変）

昭和十年以降、即ち一九三〇年代後半に入り、世界は益々激動の時代を迎へ、日独両国は一九三六年十一月、防共協定を結び、翌昭和十二年十一月、日独伊三国枢軸が諸結され、ナチス・ドイツはオーストリアを併合し、独ソ不可侵条約が成立するなど、欧州の状勢も亦、複雑怪奇となつていた。

故人は支那事変勃発時には、歩兵第三十六聯隊（鯖江）付将校として、福井県立工業学校の配属将校勤務であつた。

事変勃発直後の昭和十二年八月、第九師団（金沢）隷下に動員令が下令され、第一〇九師団（師団長・山岡重孝中将）が編成されたのである。

故人は福井市民や学生達の歓呼の声に送られて、福井駅を出発。富山で編成した歩兵第六七旅団（旅団長・谷藤展英少将）の高級副官の職に就き、大部隊の幕僚任務に励む。

部隊は八月、宇品を出帆して釜山から天津へと急行し、直ちに河北省から山西省へと、猛進撃を開始したのである。故人にとつては三回目の征途であつた。

同年十月、第二十師団（朝鮮）が山西省の玄関として有名な難所、娘子関に於て全滅の危機に瀕している時、谷藤旅団は迅速果敢に迂回して、敵の背後に迫り、寡兵よく衆敵を撃破したのである。

この戦闘は戦史にのこる輝かしいものであり、旅団幕僚としての功績は顕著であつた。

引続く同年十二月、宋哲元将軍の誇る難攻不落の居城「太原」の攻防戦は、彼我ともに死力を尽した激突となり、翌昭和十三年二月には、黄河流域まで進撃戦が決行されて、殲滅戦を展開したのである。

また同年九月、補給は困難を極め、山岳戦として悪戦苦闘の連続だつた五合作戦など、枚挙に暇がない数々の戦闘が行われ、其の間、高級副官として旅団長を補佐し、よく其の職責を完遂したのである。

当時、所属部下部隊の大隊副官の一人で、故人のことをよく識つている寺前為一氏（東京芸大出身、総理大臣賞。文部大臣賞を受賞した名声高い陶芸作家。石川県山代温泉在住）は故人を評して、人格高潔にして教養に優れ、その孤高の風格は部下将校から、厚い信任を受けていたと、往時を偲びながら語つてくれた。

斯の如く赫々たる武勲を樹てた故人は、其の後、「邯鄲夢沈」で有名な邯鄲（河北省）に転戦。爾後、青島を経由して、昭和十四年一月、祖国に帰還したのである。

帰還後は中部第六四部隊付中佐（経理員主座兼務）となる。

（当時、秘密保持のため聯隊番号の替りに○○部隊と呼称）

これらの功績が認められた結果、昭和十五年四月二九日、「功四級金鵄勲章」が授与され、昭和十六年五月九日には、「勲三等瑞宝章」、また満州国から「勲四等旭日章」を賜る光栄に浴したのである。

誠に武人の名誉、これに過ぐるものはなし、というべきである。

故人が帰国した昭和十四年の五月には、ノモンハン事変が突発して日ソ両国が戦火を交え、世界の情勢も亦、混沌状態に陥り、ソ連と不可侵条約を締結したドイツは、昭和十四年九月一日、ポーランドへ進撃を開始して、ここに第二次ヨーロッパ戦争の幕が、切つておとされたのである。

大東亜戦争

昭和十六年四月、日ソ中立条約が調印。この条約は、ソ連側からすると、荒れ狂つた動乱のヨーロッパ情勢にかんがみて、背後、即ち東方の不安を取り除く意味を持ち、日本側からすると、みずからの南進に備えたものであつた。

（但し、昭和二〇年八月九日、ソ連は条約を破棄し、対日宣戦を布告した）

そのころから日米交渉が開始され、米国は日本のアジア政策を抑止し、できれば満州事変以前の状態に復帰させようとした。日本は米国の対日経済封鎖によつて、石油その他の重要物資の補給が至難となり、中国戦線の維持さえも困難に陥り、対米妥協の可能性を見出そうとした。

然しながら、不幸にして交渉の進展はみられず、臥薪嘗胆は不可能ということで、昭和十六年十二月八日、国運を賭けた対米英開戦となつた。

海軍機動部隊は、真珠湾に集結するアメリカ太平洋艦隊に徹底的打撃を与へ、陸軍も亦、マレー、ヒリッピン、インドネシア、ニュギニア等の、南方諸地域を席巻し、緒戦の奇襲は奏功して、優位を占めた。

しかし翌昭和十七年六月、ミッドウエイ島の大海空戦は惨敗に帰し、これに依つて太平洋の戦局は逆転され、遂に主導権は米軍の掌中に渡り、昭和十八年一月、ガダルカナル島からの撤退以降は、崩壊の途をたどつていつたのである。

此の重大時局を迎へた開戦直後、故人は第四回目の出陣の命を受けて、南支に赴いたのである。

爾後、第二三軍（司令官・田中久一中将）隷下。独立混成第一九旅団の部隊長として、福建省。アモイ、或は広東省の諸作戦に指揮をとり、次の決戦を準備していた。

昭和十九年一月、大本営は「中国大陸縦貫作戦」を発令。

其の目的は、米空軍B29の発進基地を覆滅し、日本本土空襲を未然に防止することであつた。

日本軍六二万、中国軍三〇〇万が参加した、日中戦争最後の一大決戦となつたのである。

北九州が爆撃され、大本営は広西省の桂林。柳州地区の占領を期し、故人の所属した第二三軍は、九月十日より「湘桂作戦」を開始。兵はぬれねずみとなつて、闇の戦場のぬかるみを踏破し、凄惨な死闘を繰り返して、遂に十一月一〇日、桂林。柳州を攻略した。

戦禍をうけた市街地の建物は、瓦礫の山と化し、彼我の死体が散乱して、足の踏み場もない惨状だつたと、伝えられている。

故人は其の悲惨な戦闘経過を、語ろうとしなかつたが、時を同じくして惨烈な死闘をビルマの地で、身を以て体験していた私には、其の胸中が察せられる。

このようにして、故人等の勇戦奮闘により、作戦は大勝利を博したものの、南太平洋の戦局は敗退の一途をたどり、空しい勝利というほかはなかつたようだ。

湘桂作戦後、故人は二三軍隷下、第一三〇師団に所属した歩兵第九三旅団の部隊長に転任し、広州の警備司令官として勤務して、日本の降伏を迎えたのである。

以上は故人の軍人生活、特に四度に及ぶ出征に就いて、私の知る範囲の経歴と戦闘経過に、其の当時の我が国及び世界の情勢を、極く簡単に記述してみたが、群盲象を評す域を出ず、正鵠を得ていない点のあることは、論を俟たない。

敗軍の将は兵を語らず

人の一生には、焔の時と、灰の時があるといわれている。故人の三十五年の長期に亘る軍隊生活は、将に焔の時であり、人生意気に感じて燃え上つていた時だつたと想う。心頭を滅却すれば火も亦涼しと、死を超越して戦つた崇高な心は、人中の竜であり、九死に一生を得た者しか判らない、尊いものかも知れない。そのことが心の支えとなり、何の苦もなく大往生を遂げ、黄泉の客となられたと信じたいのだ。

敗戦を迎えて軍人生涯は終焉に帰した。大木が根元から切り倒された事は、一面から見れば、灰の時を迎えたのかも知れない。

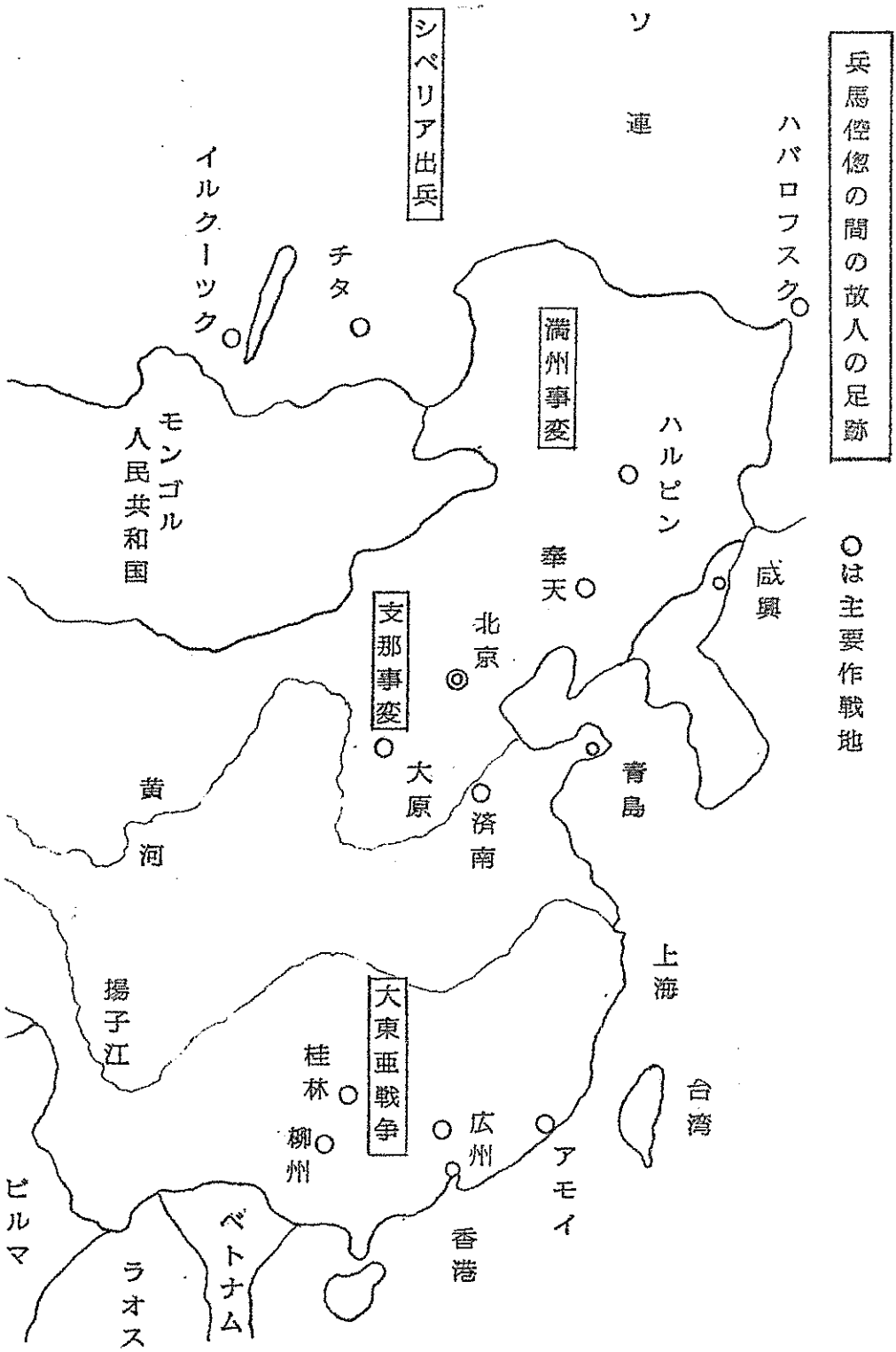
とにかく故人の生涯は、富国強兵を国是とした明治の人として、己の生命を国家に捧げて、国と運命を俱にしたのである。我が国の歴史は、故人の歴史だつたように、思えてならない。

縁を得て、次女の昭子と鴛鴦の契りを結んだ私も、国の将来を想い、鴻鵠の志を抱いて軍籍に身を投じ、中国。ビルマの各戦場に於て生も死も忘却して戦つたが、岳父であり、先輩である故人を偲ぶとき、寂として人なきが如し、という心境にたたされる。

水火を踏むような、出師の軍服姿を想う時、必ずや、壮士惨とした驕らない風格の、高級将校だつたと偲ばれる。

戦後も尚、大言壮語する軍人の多い中で、戦争を語る事を好まない故人は、敗軍の将は武勇を説く資格なし、と深く肝に銘じていたように、感じている。「一将功成万骨枯」だ

眼をつむれば、遥かな戦野の、激闘の響の中に立つ、凛々しい姿が脳裏に浮んでくる。


兵馬倥偬の間の故人の足跡
○は主要作戦地
ソ連
ハバロフスク
シベリア出兵
イルクーツク
チタ
満州事変
ハルピン
モンゴル人民共和国
奉天
咸興
北京
支那事変
大原
青島
黄河
済南
上海
揚子江
大東亜戦争
桂林
柳州
広州
台湾
アモイ
香港
ビルマ
ベトナム
ラオス

父の入院生活

一　父の入院

昭和五五年十一月初旬、突然手紙で、山代温泉にて三ケ月程、湯治したいと諸条件を伝えて、依頼してきた。

当地はすでに観光シーズン中で、父の条件に添いがたいこと、しかし温泉病院があることを、所在地と供に伝へたところ、父は自ら地図をもとめて所在地をたしかめ、直接、病院と交渉し、身の廻り品を送付して、入院を待期していた。

私が大阪よりの帰路、名古屋に立寄つて父を同伴し、十一月十七日、入院の手続をとつた。この時、父の送付していた物は殆ど「俳句」「俳画」「囲碁」に関する書籍と用具で、晩年、旅行のかなわなくなつた父の、唯一の趣味であつたかと思う。

「自分にとつて此の一年が勝負だと思う。この期をのりきつて、どこまで生きられるか、がんばつてみたい。生にこだわると思うかもしれないが、長生きするということは、一つの徳である。当分よろしくたのむ」

二　薬害に苦しむ

血液検査の結果、動脈硬化とリウマチ反応がでたので、その治療が進められたが、ピリン系注射のため、まもなく薬害があらわれた。先ず腕に、そして全身にと、その薬害のすさまじさは、目を覆う惨状で父を苦しめた。

皮膚科専門医の応援を得て、一ケ月後ようやく治癒にむかい、五十六年元旦には秀一夫妻と歓談し、三日には寺前宅で雑煮を祝う迄に快復した。

この時順三よりの手紙が、なによりものはげましとなつたらしく、その手紙によつて気持が安定し、苦しみに耐えられたようである。

三　脳血栓に倒れる

一月五日（月）、雪の猛り降る夜十時、父の倒れたことを病院から知らされる。

雪を除けチエーンをつけて病院へ疾走する。全身をケイレンさせ、意識のモウロウとした変わり果てた姿に、ただただ驚く。院長の「脳コウソクであるが低血圧のため脳血栓型をとつた。左半身麻ひか脳軟化症が残る」ということばを上の空できき、一晩中点滴を続ける父を看つた。

父には全然記憶がなかつたようだが、あわただしい見舞客が続き、一週間も過ぎたころようやく自分の病気の大変さを、意識したようである。

「自分は地獄の釜のそば迄行つたが、みやげがないのでかえされた。自分たちは誠に恥かしい夫婦であつた。今後は本当の夫婦として、心しづかな余生を過したい」

幸い手当が早かつた為、多少の言語障碍は残つたが一月下旬には殆ど快復し、二月上旬よりは付添い付の入浴も許可されて、リハビリの生活に入つた。

ガウンのポケットに片手を入れ、背すじをのばして廊を歩いていたスタイリストの父の姿が、今もほうふつとする。

このころ見舞いに来た妹と二人で車椅子にのせ、病院中を廻つた時のうれしそうな父の顔は忘れられない。この後なにかというと「車いす」「車いす」と口にしていた。

車椅子に乗りたる父はうきしるき
顔にこやかにあちこちを指す

四　ギックリ腰になつて

二月十五日（日）、再度病院からすぐくるようにと電話がかかつた。俗に云うギックリ腰になつて、右も左もむけないという。週二回の腰椎麻酔注射に毎晩、痛み止めのざ薬を投入する生活となつて、まつたくの寝たきりとなつた。

ひとりではどうしようもなく、付添婦はなかなか見付からず、全く困惑したが、義妹（美代子）の応援で急場をしのぎ、婦長の努力でよい付添人（坂下さん）を得て、弟のためにできるだけ経費を節約したいという、父の意にそうことができた。

「老人ばかりを一ケ所に収容することは、老人をいつそう老化させる。老人施設は幼児施設と併設するのが、老人のためにも幼児のためにもよい」

このころは、ひ孫の光子や幸子の訪れを、とても喜び、いつも心待ちしていた。

五　えん下麻ひに苦しむ

三月に入るや腰痛は治癒したが、衰弱はいちじるしく、えん下まひの為、食物が喉を通

らなくなつて、点滴のみに頼る生活となつた。しかし、手も脚も点滴の針が思うようにとおらず、看護婦泣かせとなり、父をいらだたせ、点滴を拒否した。

父はかねてより、四国六十番札所の大日如来の御守りを、まくら辺に祭つていたが、そのお告げであると力をふりしぼつて立ち上り、牛乳・ジュースなどを必死に飲もうとした。しかし、そのまま口からあふれ出る、すさまじい姿が続き、父をいつそう衰弱させて、他界へ歩み初めたことを感じさせられた。

「脚にのみ気をとられて、正しい食生活をないがしろにしていた。動脈硬化ほど恐ろしいものはないことを、みんなに教へてほしい」

このころ、来院した正之に、ひげをそつてもらつて、とてもよろこんだ。

帰宅後、そのすさまじい食事ぶりを案じて差し出した、妹と二人からの見舞状に、入院中ただ一度、声をあげて泣いた。

又道夫の来院を今日か明日かと待ちわびながら、自分から要請しないという父らしい一面をみせ、名古屋より家族の者がつくや、その喜びはひとしおで、大声で語りはじめ、後事は寺前とよく相談してきめるべきこと、義妹や私に感謝していることを述べた。

三日後、遺言があるからとの病院よりの電話でかけつけると、恩給の扶助料を母に渡るよう、手続きしてほしいとのことであつた。

六　飢餓と戦う

三月中旬、点滴は再開され、父はその苦しみに耐えたが、衰弱は一向に快復せず、頼みの鼻腔栄養は病院あげての努力もむなしく、父の体は受けつけず、口からは水さへも通らなくなつた。

夜中に「百万円の食事席を用意せよ」と叫び、このころ訪れた（四月五日）弟に「接食」「接食」と、力をふりしぼつて書きつづつたうつたえは、声を呑む思いであつた。

ただただ涙のこぼれる毎日であつたが、度々の妹よりの電話にはげまされて、看り続けることができた。

父はこんな最中でも「ソ連軍はまだポーランドに進入しないか」と、突然大声で聞いたりした。

三月十一日。飯田夫妻、三月十二日。直枝。正之、三月二一日。ひで。道夫・秀史、

三月二七日～二八日・直枝・正之。ゆかり
四月十三日・順三、　来院あり。

七　仏縁にすがつて

四月十四日、信次が慰霊訪中の旅から観音像をもち帰つた。帰国したその日のうちに、丸岡の白道寺を訪れ、感得如来にひたすらに祈つて、その守護札をもらいうけ、直ちに父のもとへと走つた。護符を敷いて観音像をまつり、守札を枕の下に入れた。

施すすべもない父への唯一の孝養と、友人のすすめに、わらをもつかむ思いで仏縁にすがつたのである。

そのうちに水がのめるようになり、あの日のようによあれよと牛乳やジュースが喉を通り、そのうち、流動食から粥食に移つて病院の食事は余さず食べ、おかわりを要求する迄になつた。

耳はいつそう遠くなつたものの、全く別人のごとく柔和で、三度の食事ごとに仏像に手を合わせ、春日をきれぎれにねむる姿がつづいた。

四月十日、東京から空路、正史・まや夫妻が見舞いに来院。車いすに乗つて東京を訪れる夢物語を大声で語り止まず。見舞品の二部式ねまきを喜び（死出の旅に着用）水ようかんに舌づつみをうつて、まことに楽しそうであつた。

八　快復そして名古屋へ

四月下旬、容態は日増しに快方に向ひ、博・血圧共に安定した。寝たままではあるが入浴もでき、二十五日～二十六日は直枝に付添われ、わがままいつぱいに甘えていた。

名古屋へ帰りたいという訴は、このころ一そう切実となり、この時、直枝と私の両名に口述筆記をとらせた内容は、そのことに終始していた。

婦長とも相談、三十日、内科医の承認を得て、帰名についての父の希望を書状に書いて送り、五月一日、院長も名古屋行きを快諾して、その万全の援助を父に伝えたところ、手を合わせて喜んだ。

これで父は八十八才迄生きるであろうと、私は信じた。

父の突然の死

五月二日、朝からとても機嫌よく旺盛な食欲で、餅・さしみなどを食べたいと、にこにこと要求し、夕食には飯田からの見舞品のスープを要求して、その肉をうまいうまいと食べた。

五月三日、目をさますや「道夫はまだか」と、その来院を待ちわび、昼すぎ道夫・美代子の両名が着くや、大声で退院の希望や、いきさつをうつたえていた。

久しぶりに光子・幸子も来院し、父をのぞき込むと、父はいつになく愛そ笑いをして、「さようなら」と手をにぎり合つて帰つていつた。

しかし喉になにかひつかかつたらしくて、ぜいぜいと息が苦しそうで、三度けん引をしてもらつたが、なおらず、父はいつになく点滴を要求した。日曜の午後のため婦長の不在を告げると、「そんなら、ひとみにしてもらうから」といつて、うとうとし始めた。

いつもとの様子の違いが気にかかり、義妹の夜の付添いをことわつた。弟夫婦の泊る準備のため一旦帰宅し、六時半ごろ病院へもどつた。その間、大量の排便が二度つづいた由、なんとなく、ぐつたりした父は待ちかねたように、「もう寝たい」と寝がへりを要求した。義妹と二人で横臥させ、他の三人は夕食に出た。

ふとみると、父がふしぎなあくびをしているのに、はつとなつた。急いで酸素吸入器をあてがい、ふしぎな予感に枕もとの楽呑の水を与えた。次いでガーゼをしめらせて、くちびるをふきつつブザーを押して、急を看護婦室に知らせた。

かけつけた若い看護婦は脈をとるなり、「もう駄目です」という。

後をたくして玄関へ走つた時は、名古屋ナンバーの車は走り去つたあとであり、とつて返した時、父は目を落した。

（昭和五六年五月三日・午後六時四十分）

余りの突然の死にぼう然となつたが、そのあたたかい体にふれると、どつと涙がふき上げてきた。今もその感触は忘れがたい。

やがて連絡をうけた三人はもどり、院長もかけつけて、病死ではない、大往生であることを告げられた。

そのあと、義妹はまだあたたかい遺体をだいて、弟の運転する車で夜道を、母の待つ名古屋の父の部屋へともどつた。

親思う　心にまさる　親心

野辺おくりをすませて、自室によこたわつた時、ようやく父の云つたことばや行動の、真の意味がすき透つて見えてきた、まことにおろかしい私である。

なぜあんなに名古屋へ帰りたがるのかと、帰へしようもない窮状の中で怨みに思つたことも、父にしてみれば一人で奮闘している私を、これ以上苦しめまいとする親心でもあつたかと、申し訳ない思いである。

又飢餓状態のさ中、見舞いに訪れた美貴に、「どこも痛いところはない、どこもつらいところはない」と伝えた由、そのひと言で、看護人の心がどれだけ慰められたことか。

その深い思いやりに感謝している。

どんな苦しい病状にあつても、ただの一度も、うめいたり泣きごとを云つたことはない。種々、脳軟化症的なちようこうはみられたが、最後まで病気に対して弱音をはかなかつた毅然たる姿は、さすが武人部隊長であつたと、心から父を誇らしく思つている。

昭和五六年五月　　昭子記

献詩　信次

武勲赫々震乾坤
報国誉高慕英風
願留千載称瀧山
霊前猶聴聖流声

乾坤：天地、世界
千載：千年、永遠
聖流：故人の戒名

英風：優れた風格
瀧山：故人の戒名
戒名は瀧山聖流

武勲赫々乾坤を震わせ
報国の誉高し英風を慕
願わくば千載に留めて
瀧山を称えん
霊前猶聴く聖流の声

献歌　父に捧ぐ

（昭和五六年五月三日午後六時四十分永眠）

柿につむ雪

梢先の柿につむ雪見やりつつ
　腦血栓の父を看りぬ

雪しまく闇にま対ひ看る夜は
　点滴の音耳底に響る

枯生きる態のけはしさ白髪たてて
　埴輪のごとき貌さらす父

乳呑児のごと母恋しという父の
　しみじみさびし歯のなき口は

血をつなぐ敷りに思はずはき捨てし
　ことば悔ひつつ雪ふみてをり

蒼きガラス器

はる風の窓見呆けるに病む父は
　何おもへるやとすがりてききぬ

あうらのみ脹れる父の脚さすり
　泣きやすくをり眸そらしつつ

夜半さめて父のむつきを換へにつつ
　春の蛙の啼くをとおきく

病む父の寢がへりを終へ星あかり
ひさご座（北斗七星）の夢におもひをつなぐ

渇きたる父のくちびるぬらしつつ
　目なじり曳ける雫にぬれぬつ

ボンベより泡限りなく生れ消ゆる
　静寂を父よなにおもひ臥す

彼岸より見れば吾らも泡なるや
　酸素ボンベの蒼きガラス器

春の恍惚

身のうちのなべてさらしつつ春陽なか
　父は他界へ歩み初めたり

とこしへの眠りのまへか昼夜なく
　春日を父のきれぎれにねる

生まるるも死ぬるも意志のままならず
　旅臥す父の夢は枯原

涯(キワ)の椿の紅き影うつす
　底きよき水いずべに逝くや

この春のまばらなる桜花わが委へし
　胸処にふかくしらしらとちる

生も死もわかたずなりて春らんまん
　白布にねむる父の恍惚

山狭に霞たなびく水あかり
　父逝かむ日もかくしづかなれ

もう寝むと背(ソビラ)かたむけ竹の秋
　父は他界へひとり逝きたり

次女　昭子